

のです。

もの造りの人はその念おもいのままに、自分の技術を用いて作品を生み出しますが、生み出され造形された作品は、それを造形した人の魂（心）の現れであります。それを同じ魂（心）で共感する人は、最も相応しい観賞者だと言えるでしょう。つまり、作品に込められた作者の魂（心）、念おもいを、蚕かこが造った繭まわらひの糸を引出し、たぐりよせるような行為が観賞という行為だと言えます。

このように考えて来ると、その人の「身体」はまさしく念おもいの固まりです。しかし、その思いが、ただ肉体中心、つまり、肉体だけのことを念おもう念おもいで満たされているなら、それは正しく魂の念おもいが働いたとは言えません。なぜなら、人間の魂（心）は、この世の目に見える肉体にだけ関心を持ち、肉体の欲望を生み出す働きだけでは満足しないからです。

霊の働き

聖書の中に次のような言葉があります。

どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊と魂と体も何一つ欠けたところのないものとして守り……。

—テサロニケの信徒への手紙一五章二三節以下—

私たちの「身体」とは「肉体と魂」とが同時に一つの働きをしているものだ、ということを示しましたが、今、紹介しました聖書には「霊」ということが語られています。つまり、私たちの身体は「肉体と魂と霊」の働きであるということです。ふたたび一般的な国語辞典の「霊」についての解説を見ますと「人間の知識や経験を超えたそこに何かあると感ぜられるが、実体としてとらえられない神秘的な現象(存在)」と記されています。

X

X

ここで少し、「霊」に関わる議論の一つを紹介しておきます。それは、人間は、^{フニヒトマ}霊・^{ゾシヤク}魂・^{ソウ}体という二つの部分(実体)から成り立っている者だと理解(三分説・三元論)するのか、それとも霊と魂と体というのは三つの部分(実体)という意味ではなく、その全体自体が命の働きなのだが、その働きを言葉で表現すれば三つに分節できるといふ意味に理解するのかということですか。私自身は、後者の意味に理解しています。このことで少し付け加えておきますと、人間は「肉体」と「魂」から成り立っているというギリシヤ的な二分説(二元論)があります。その場合、「肉体」は汚れており、「魂」は清い、だから汚れた肉体に閉じ込められた魂を解放しなくてはならない、その働きが宗教である、というように考えます。このようなギリシヤの二元論的な人間観がキリスト教に入り込んで、肉体を罪なるものとする禁欲的なキリスト教が生まれて来しました。その場合人間の魂を救う霊的な権威は、教会だけが神から与えられて持っているというのが、中世のローマ・カトリック教会でした。この教理から「教会外に救いなし」というカトリック教会の教義が生まれて来たのです。

たしかに、二分説や三分説は人間を理解するのに分かりやすい理屈だと思えます。しかし、聖

書の人間についての考え方は、先にも申しました通り、二つ、または三つの実体が人間を成り立たせているというのではなく、それは同時であるということです。そのうえで、言葉でその働きを表現すれば、二つ又は三つの分節表現になるということなのです。

肉体と魂と霊という三つの実体に人間を分けることはできません。しかし、肉体は肉体としての命の働きがあり、魂は魂としての命の営みがある。そして霊は霊としての命の働きがある。これらの命の働きが相互に関わりあって一人の人間が人格として本来在るべき在り方が出来るのです。人間としての本来の在り方とは、人間が人間らしくなると言うことであり、それは、自分を自分として生かす絶対平安の命の芯に目覚めた「真つ当な自我」に成ると言うことであります。

このような人間の在り方を使徒パウロは「……あなたがたの霊と魂と体も何一つ欠けることのない……」と言ったのです。つまり、この世で生きるとは、肉体の命だけ、魂の命だけ、霊の命だけの一つだけを大切にするのはなく、それらの命を同時に生きることが、命を大切に生かす方”ということなのです。

では、「霊」とは何であり、どのような働きをするものなのでしょうか。

霊とは何か

「霊」について語ることは難しい。霊は、その宗教の形態によってそれぞれの様子を呈するか

からです。だから一般的な国語辞典などでは、先にも紹介したとおり「人間の知識や経験を超えてそこに何かあると感ぜられるが、実体としてはとらえられない神秘的な現象または存在」と記し、つづけて「靈感・靈験・靈気・靈木・靈域・靈魂」とあり、さらに「精神」とも記してあります。これは極めて総論的、且つ常識的で無難な解説であり、一般的な国語辞典にそれ以上の内容を期待できないのは当然であります。

わたしが「霊」について語る立場は一応「聖書」からです。しかし、聖書の立場と言っても、厳密には必ずしも一定していません。ここで語ることは「わたしの解釈」ということになりません。

また、聖書には「汚れた霊」とか「悪霊」と訳されている「霊」が登場しますが、ここでは主として「神の霊」「聖霊」と表現されている「霊」の働きを、聖書にあるいくつかの出来事とおして見ることにします。

霊ソネウは創造的な働きデユナミスと力

新約聖書を読まれると「霊」「神の霊」「聖霊」等が多く登場することに気づかれるでしょう。その場合、常に「働き」または「創造的な働き」として語られています。つまり、聖書に於ける「霊」は抽象的概念でなく、もっぱら「創造的な働き」「動としての命の動態」として登場します。霊が抽象的概念でないことは、「霊」が「息」または「風」を意味していることでも了解で

きます。

旧約聖書は、

×

×

はじめに、神は天と地とを創造された。という言葉で始まり、つづいて

地は混沌であつて、闇の深淵の面にあり、神の霊が水の面に動いていた。

—創世記一章一節以下—

と語ります。聖書の天地創造物語の冒頭に「神の霊」が登場するのです。

ところが、先の共同訳に比して関根正雄氏は、その後半のところを「神の霊風が大水の面に吹きまくっていた」と訳します。そして氏は「『霊風』と訳したのは霊と風の両方の意味だからであり」同時に「その言葉の訳の問題だけでなく、内容に非常に関係してくる」と言います。（関根正雄著作集第十三巻）旧約聖書についての専門的な知識はわたしにはありませんが、関根氏の「神の霊」のとらえ方に私は共感します。

×

×

また、聖書は人間の創造を次のように語ります。

主なる神は土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹きいれられた。人はこうして生きる者となつた。

—創世記二章七節以下—

「命の息」とは「吹きまくる『命の靈風』」であり、まさに、人間は、この「靈風を吹き込まれることで生きる者」となったのです。では、「靈風を吹き込まれる」とはどういうことなのか。しようか。

ここでもう一度、「靈」は抽象的概念ではない。また固定化した一つの実体でもない。靈は創造的な力^{デュナミス}ある働き。動としての命“即ち、命のたぎり”、命のほとぼしり”、靈風”それ自体であることを確認しておきましょう。この靈風により塵で形づくられた人間は生きる者となったのです。したがって、「生きる者になる」とは、絶対的創造的な命のたぎりそのものが、また創造的な命のほとぼしりそれ自体が、人間の肉体も魂も光と愛と力とに充滿させることであり、主体でない人間に主体性を付与することであり、簡単に言えば、土の塊^{かたまり}、塵にすぎない人間、即ち本質的に自分自身の力や智恵で自分の主人たり得ない人間が、自分自身の判断で生きることを許され、神と交わる知性と感性と意思、つまり、靈性を付与され働き出したということです。これは「神にかたどり、神に似せて人が創造された」（創世記一・二六）ということでもあります。まさに人間は神の靈の創造的な命のほとぼしりによって有るべき人として有らしめられたということです。その意味で靈は「創造的動力そのもの」だ、と言えます。

X
X
このような創造的な力としての靈の動態は、イエス誕生の場に於いても見る事ができます。

イエス・キリストの誕生の次第は次のとおりであった。母マリアはヨセフと婚約していたが二人が一緒になる前に、聖靈によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人

であつたので、マリアのことを表ざたにすることを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、神の天使が夢に現れ、「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によつて宿つていたのである。……」

—マタイによる福音書一章一八節以下—

これは「マリアの処女懐胎」の出来事です。古来いろいろとその是非をめぐつて論議されてきました。しかし、聖書が語る「聖霊によつて身ごもつた」という出来事を生理学的な是非の問題としてではなく、また聖者伝説として理解するのではなく、ましてや聖書に記されてあるからそのとおりだ、と妄信するのではなく、その出来事の語りが秘め、そして提示している根源的な意味に気づかねばなりません。それは、人間が日常経験する世界の枠組み、即ち、知性や感性や意思及び経験の枠組みを全く超えた命の根っこからの《創造的な命》の現成、または、命の元の決定的な《しるし》であります。これは神の霊の働きそのことの表現です。さらに言いかえれば「神の霊によつて身ごもる」ということは、この世のどのような関わり、つながりによつて生じることとは全く違う、存在の根源にたぎる命が、そのまま、この世の一人の女であるマリアの身に直接、直にかかわつた出来事として現成したということであり、それはまさしく暗闇の世界に神の光が現れ出たということの意味し、証示してゐるのです。

それゆえに、この出来事はこの世の枠組みで考え、判断し決定することを正しいと信じ込んでゐる者達にとつては、受け入れられないこと、理解できないこと、信じられないこと、馬鹿げていることであり、その実、恐るべきことなのです。だから、マリアは「どうして、そのようなこ

とがありえましよう。」と不思議に思い(ルカによる福音書一章三四節)また、悩み戸惑うヨセフには夢の中に天使が現れ「恐れずに、マリヤを迎え入れなさい。マリヤの胎の子は聖霊によつて宿っている」と告げたのです。

ここにおいても聖霊は神の《創造的動力》《根源的な命のほとばしり》《起動力としての命のたぎり》そのこととして現成しているのです。

さらに、聖書は、イエスが宣教を開始されるその時に、起動力として霊が現成したことを次のように語ります。

そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。「わたしこそ、あなたから洗礼をうけるべきなのに、あなたがわたしのところへ来られたのですか。」しかし、イエスはお答えになった。「今は止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々に相応しいことです。」そこでヨハネはイエスの言われるとおりにした。イエスが洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に下つて来るのを御覧になった。このとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者」という一声が、天から聞こえた。――マタイによる福音書三章一三節以下――

イエスは、その十字架の死にいたるまで徹底して己を捨て、人を愛し、人と共に生き抜かれた。

この生きざまこそが「神の心にならう者」です。しかし、その生きざまはこの世の人がそれにならうべき倫理的な規範なのではありません。イエスの生きざまを人間の生きる倫理的規範として受けとり、その結果、はたして自分はそのように生きられるか否か、ということをも自分の生き方として正面から取り上げるような事をするなら、その人は一見、誠実な生き方を求めているように見えても、結局はイエスの前にひれ伏して「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」と真剣にたずねた人のように、最後には「氣を落とし、悲しみながら立ち去る」ことになる。(マルコ福音書一〇章一七節以下)さもなければ、いつまでも神との関係に不安を抱きながら、また心の底に本当の安心を得ないままなんとなく信仰人として過ごすことになるでしょう。

「これはわたしの愛する子、わたしの心にならう者」と言う声が地上からではなく、天がイエスに向かって開き、地上に響いたというのです。それと同時に神の霊が鳩のようにイエス自身に下って来るのをイエスはご覧になった。いったいその場で何が起こったのでしょうか。このように福音書が言い表す証示の内容は何なのでしょう。

そのことを一口で言えば、天と地とが一つだという証しなのです。天とは神の全き支配の世界です。神の支配の世界にあつては、未だ、敵も味方もない。罪も救いもない。「ない」とは、未だ敵も味方も生ずる以前の世界、未だ罪も救いも生ずる以前の「スツカラカンのスツカラカ」の世界ということ。命のたぎりの世界とは、このような世界のことです。敢えて言うならそれは「無」の世界です。「無」とは「有り無し」の「無」ではなく、未だ有りも無しも生まれぬ絶対無即絶対有の世界です。それこそが本当の「命」が充満し、たぎっている愛の世界です。と言っても「愛」という概念化できるそれが有るといふ事ではなく、愛としか表現できない「無即有

としての命がそのままたぎっている。神の支配の場なのです。

それにしても、そのような「無即有」の世界が、地上で現成するとき、どのような姿をとるかと言いますと、おそらくどのような人も「そうだ！そうだ！」と自然に素直に共感できる、イエスの生きざまになるのです。それゆえに、天からの声は「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者」と響いたのです。そもそもその響きそのことが「そうだ！」そのものなのです。そして「そうだ！」を比喩形象または象徴の意味、さらに可視的に表現すれば「鳩」のような形になるのです。例えばマタイによる福音書一〇章一六節にあるように。

ともかく聖霊は、「そうだ！」を「そうだ！」へと起動する神の命の働き、または力なのだと言えます。

一般に「宗教」を語るとき、その宗教の教義(理屈)の型枠に基づいて提示される。キリスト教の場合なら教会が正統的教義と認めた理屈(教義体系)があり、固定化された教義の内容(創造・墮罪・受肉・贖罪・終末・救済)を聖書を根拠として語ることで、すべて事足れりとし、聞く者もその教義を信ずることで、キリスト教を学び知ったと思ひ込んでしまう。

だが、そのような教義的、教会的に固定化された語りや学びのそこに「宗教」や「信仰」はあるのだろうか。極論するなら、そのような次元には聖書の宗教も信仰もない。ましてや神や霊とは無関係な場だと言えましょう。なぜなら、その人は教義を自分の知恵で理解し、自分の情念で信じ、自分の信念で思い込み、それを基本にして信仰の論理を展開しているからです。したがってそこでは、人を生かしている命の芯とは何の関わりもないのではと思う。にもかかわらず、それらの教義を聖書の言葉を用いて完璧に語ることで良しとするなら、その語りは聖書が証示する

命の言葉となるのだろうか。

例えば、「人間は罪人です」という教義に基づく人間観が先ずあり、その観念に基づいて自身を見、又は人間一般を見てしまうと、自分や人間一般がそのように見えて来る。その結果とても困った事が起こる。それは、その視点を聖書的という事で絶対化し、その観念で人間や世界を限定してしまう。そしてその確信や信念とは異なる立場を受け付けず、場合によっては異なる立場を非真理、また悪や罪として拒否して「異端」という名で冷酷無情に排除し抹殺してしまうという狂信が起こる。

その結果、聖書が証示する人間の「罪人性」という宗教的、実存的な尊く深い教えの真価を潰してしまふことになるなら、それはイエスやパウロが指摘したような「本当の意味の神を知る智慧」の欠落、ただの自我による信念の「熱心さ」になつてしまふかもしれませぬ。

わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証ししますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかつたからです。

—ローマー一〇・二、マタイ一五・一四—

どの様な場合でも一つの宗教的教義または一つの主義主張の理論を絶対的な前提となすとき、そこにあるのは、「その人の信念、又は情念」で、「自分自身を縛り上げられた自分」だけです。これは一つの主義主張に補囚され、マインドコントロール(統一化)されているにすぎず、極めて人間主義、自己中心主義的独善になりかねません。そのような宗教集団や政治集団、世俗的常識集

団等がこの世に満ちて人間疎外が生じていることは明らかです。

聖書が提示する宗教や信仰は人間の主観的な信念を根拠とはしていない。要するに、私がこのように語るのは、特に宗教とか信仰を語るときに「徹底した自己否定」ということの大切さを強調したいからです。これについては三十年程前に出した「途上」という冊子の冒頭に次のように記しました。

「人間の考えが、或る特定の時と場で固定化するとき、その人間は人間として、もはや生きてはいないで死者となったのではないかと思えます。特に、宗教的生に於ける固定化は、その宗教、ないしは、信仰の命の喪失をきたらせません。常に自己の生の在り方を固定化から解放し、自己自身を否定しつづけるところに宗教は命を保ち、信仰者は真に信仰者として生きつづけることが出来るのであり、同時に、そのような生へ人間をおし出して行かせるものが真の信仰であり宗教であると思えます。」

この思いは現在も同じであり、さらに、そのような人間の生き方へ押し出して行く働きこそが聖書が言う「聖霊の働き」だと私は了解しています。

使徒達の場合

新約聖書の使徒言行録は、不安の中でこの地上に留まる使徒たちに復活のイエスが、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして……地の果てに至るまで、わたしの

証人となる」と約束され、天に上げられたと記しています。(一章七節以下)そして事実、五旬節の日が来て使徒一人一人に聖霊が降り、彼らの伝道活動が始まりました。(使徒言行録二章)

この場合聖霊による力を受けるとは、イエスとイエスが提示したことの何たるかを了解する智慧を得ることだ、とヨハネによる福音書は教えています。

わたしが父(神)のもとからあなたがたに遣わそうとする弁護者、すなわち、父(神)のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさる。

—ヨハネによる福音書五章二六節以下—

その方(聖霊)が来れば、罪について、義について、また裁きについて、世の誤りを明らかにする。……真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。

—ヨハネによる福音書一六章七節以下—

ともかく、イエスが提示した真理を使徒たちが了解し、その真理を多くの人々に伝え始めるように促したのは、彼らの単なる情熱や信念ではなく聖霊による力と智慧によるといふことです。この事をキリスト教の歴史では、キリスト教会を生み出したのは使徒達の聖霊体験によるのだと言われています。

「ブネウマ」
靈の働きは創造的な力と智慧ソフワイ

以上のように学んでくると、イエスの提示する真理に開眼するためには、「聖靈」の働きに与らなければ何も語ることが出来ないことを知るのであります。しかも、聖靈の働きの内容は、創造的な力と同時に智慧であるということです。

このことは、人間的な知恵や努力、つまり「この世の知恵」によつてはイエスが提示した真理には開眼できないということですから、イエスが提示する命の世界に開眼するためには「徹底的な自己否定」が求められるのです。それは、どのような意味においてもこの世的な自我によつてイエスが提示する命の世界を抱え込もうとしてはならないということです。だからイエスは言われた。「はつきり言っておく、だれでも上からの力（靈）によつて生まれなければ、神の支配を享受することはできない」（ヨハネ三・一〜一五）

それにしても上からの力としての聖靈の体験を個人的、且つ主観的な熱狂にすり替えてはなりません。聖靈が降つたと言つて異言を語るだけが聖靈体験ではありません。これについて使徒パウロはコリントの教会宛ての書簡一四章に彼は彼自身の体験を語りつつ大切な事を提示しています。

わたしが異言で祈る場合、それはわたしの靈が祈っているのですが、知性は実を結びません。

では、どうしたらよいのでしょうか。霊で祈り、知性でも祈ることにしましょう。霊で賛美し、知性でも賛美することにしましょう。さもなければ、仮にあなたが霊で賛美の祈りを唱えても、教会に来て間もない人は、どうしてあなたの感謝に「アーメン」と言えるのでしょうか。あなたが何を言っているのか、彼には分からないからです。あなたが感謝するのは結構ですが、そのことで他の人が造りあげられる(霊的に成長する)わけではありません。わたしは、あなたがたのそれよりも多くの異言を語れることを、神に感謝しています。しかし、わたしは他の人達をも教えるために、教会では異言で一万の言葉を語るより、知性によって五つの言葉を語る方をとります。

—コリントの信徒への手紙Ⅰ—四章一四節以下—

聖霊を受けるとは熱狂的になり、知性を軽んずることではなく、何よりも「真つ当な自我」、つまり、深く神の智慧に開眼した主体的人間になることです。そして、聖霊により神の世界に開眼するとは、人が自分自身の生きる根拠を知る智慧を得ることであり、それは、どの人も神に命を与えられて生きる者とされている神の大決定に気づくことです。そのような智慧は人間存在の根柢に秘められている神の隠された智慧であるとパウロは言います。

わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では智慧を語ります。それはこの世の知恵ではなく、またこの世の滅び行く支配者たちの知恵でもありません。わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の智慧であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界が始まる前から定めておられたものです。この世の支配者たちはだれ一人、この智慧を理解しませんでした。もし理

解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。しかし、このことは「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神はご自分を愛する者たちに準備された」と書いてあるとおりです。わたしたちには、神が「靈」によってそのことを明らかに示してくださいました。「靈」は一切のことを、神の深みさえも究めます。……わたしたちは、神からの靈を受けました。それでわたしたちは、神からの恵みとして与えられたものを知るようになったのです。わたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、「靈」に教えられた言葉によつていいます。つまり靈的なことを靈的なことによつて説明するのです。自然の人は神の靈に属する事柄を受け入れられません。その人にとつて、それは愚かなことであり、理解できないのです。靈によつて初めて判断できるからです。

—コリントの信徒への手紙Ⅰ二章六節以下—

イエスは人間の生き方の「根っこ」の歪みを問うておられる。しかし、人は生き方の表面を改善することや、知識を付加し、変更することで幸福を得ようとする。それは、弱っている樹の根っこを見ないで、幹や枝葉だけに手を加えることで樹に元気を与えようとするのと同じです。

人間の生き方の歪みは、人間の念いの歪みです。人と念いが別々にあるのではない。その人の念いが塊かたまりつてその人と成るのです。その意味で人間は念いの塊かたまりなのです。

悪人がいて、悪を企てるのではない。悪の念いがその人を悪人と成すのです。その時、その人の体も心も知恵も悪の方に動いているのです。

人と喜びとが別々にあるのではない。喜ぶ念いがその人の肉体や精神を喜びに更新するのです。

要するに、念いとはその人の全存在であり、その人そのものなのです。

聖霊の働きは人間の念いに関わるものです。ですから聖霊が人間の念いを更新させるとき、その人の生き方、つまりその人の全存在は更新するのです。パウロは言います。

聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」と言えない。

—コリントの信徒への手紙Ⅰ—二章三節—

これは、十字架にかけられたイエスは「神に見捨てられた者」だと世間では思われるが、聖霊の力と智慧ちえにより更新された念いに生きる者は、イエスは神の栄光を現した方だと告白し、その信仰に生かされる者と成る、と。ですからパウロは次のように語ります。

今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今
はもうそのように知ろうとはしません。だから、キリストに結ばれる人はだれでも、新しく創造
された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から生ずるこ
とであつて……。

—コリントの信徒への手紙Ⅱ五章一六節以下—

彼は、聖霊によって更新されることを「新しく創造される」と言います。古い肉적인自分は解
消し、神の命に生かされる新しい自分が出現したと歓喜するのです。

パウロが「肉に従つて」という「肉」とは、きよ靈は聖く永遠であるが、肉体は汚れて限りある

つまらないもの“というギリシヤ的な「靈・肉」二元論の意味で語っているではありません。「肉」と言うとは身体的な欲望のことだと思いますが、そうではなく、自己中心的な歪んだ自我を根拠とした念、つまり人間中心主義、合理主義、利己主義に生きる人間の全存在を意味しているのです。それを「肉に従つて」と言うのです。

その意味で「靈に従つて生きる」ということは、神の命を根拠として生かされる者へと、聖靈によつて更新された自己の全存在のことです。

このように人間が肉的生から靈的生に創造更新されるためには、即ち神の命の世界に開眼しその命に生かされる為には、神による「上からの力によらなければ」ならないのです。(ヨハネ三・一以下)

神による上からの力とは、聖靈の創造的な働きとしての力であると同時に「神の深みまでも極める智慧」をいただくことです。(コリントの信徒への手紙Ⅰ二章六節以下)このような生き方をパウロは「キリストに結ばれる」と言います。この場合の「キリストに結ばれる」とは、人の思い計らいや業によつてではなく、キリスト(神の大きいなる命)によつて新しく創造され、神の命を根拠とし、神(キリスト)の命の内に包まれ、抱きかかえられうなが促されて生かされることです。

「神(キリスト)の命に結ばれる」ために「聞いて信じなさい」とパウロは言う。(ガラテヤの信徒への手紙三章二節)それは「ただ聞き、ただ信じる」ということではない。ただ聞き、信じただけなら妄信、狂信、または信念の類です。ましてや、それを理解するだけなら何の意味もない。彼が言う「聞き・信じる」とは、その中へ自分を置くこと、投げ込むことです。道元流に言えば、「ただわが身をも心をも放ち忘れて、神の家に投げ入れて、神の方かたより行われて、これに

従い持つて行くとき、力をも入れず、心をもついやさずして、死生を離れ……”といふことです。つまり、聖霊の創造的な智慧と力に対して自分を開くこと、渡すことであります。このことは、「啓示(信仰)と理性」の問題に関係します。

啓示^{けいじ}と理性

一般に「啓示」とは、神からの示しであり、「理性」とは、人からの発想だとされる。したがって、啓示と理性とは対立し、相いれないものだと思われている。宗教信仰は啓示に基づく霊的な智慧であり、人間理性から発する肉的な知恵は否定され、その否定の上に信仰は成り立つとされる。このような信仰の立場に対して、人間理性に信をおく人たちからは、信仰の立場の持つ問題性をいろいろと指摘される。曰く、そのような信仰の立場は、個人的にも社会的にも人間の発達と自己実現を疎外してしまうことになる。たしかに、一方的に啓示の呪縛^{じゆばく}のもとにある信仰者やその集団は、ときに、この世の人間世界を積極的に否定して排他的独善に陥り、非社会的、反社会的な個人や集団となり、さまざまな混乱を起こすことは、昔も今も同じです。

パウロの場合

この問題についてパウロのおよその見解は既に述べたが、先に紹介した教会内での「異言^{いげん}」に

関する彼の語りを今一度聞きましよう。

彼は言います。「わたしは、あなたがたのそれよりも多くの異言(神の啓示による霊的言葉)を語れることを、神に感謝しています。しかし、わたしは他の人たち(教会に来て間もない人)をも教え、その人たちが霊的に成長するために、教会では異言で一万の言葉を語るよりも理性によって五つの言葉を語る方をとります」。「わたしが異言で祈る場合、それはわたしの霊が祈っているのですが、理性は実を結びません。ではどうしたらよいのでしょうか。霊で祈り、理性でも祈ることにしましょう。霊で神を賛美し、理性でも神を賛美しましょう。」(コリントの信徒への手紙Ⅰ一四章一四節以下)

イエスの場合

では、イエスの場合はどうだったのでしょうか。イエスは神のお恵みの世界、つまり霊的世界を人々に提示するのに「譬え」を用いられました。聖書に於いて「譬え」という言葉の意味は、二つの異なるものをならべて一方によって他方を理解することです。それは、みんながよく知っている事柄を語るることによって、まったく性格の違う別の世界を提示し了解せしめることです。福音書には「イエスはたとえを用いて人々に多くのことを語られた」と記されてあります。(マタイによる福音書一三章三節)

つまり、イエスの場合は霊的世界を皆が見て聞いて、触れる事で了解できる言葉と事柄を通し

て示そうとなされたのです。特にイエスは難しい用語を用いないで神の啓示の世界を人が洞察出来るように語られました。イエスにとってこの世と神の世界とは別々ではなく、またこの世は忌むべき汚れた世界でもなく神の恵みと霊的な力と智慧とが満ち、たぎっている世界なのです。ですから、花や鳥を示し、雨や風や光を放つ太陽を語り、「よく見なさい」「注意して見なさい」と勧められた。それは、そのものを通して神の命の世界を「悟りなさい」という意味です。さらに、「見えないのか!」「聞こえないのか!」「耳ある者は聞きなさい」「聞く耳のある者は聞きなさい」と迫られた。(マタイ福音書六・二六以下、一一・一五、マルコ福音書八・一八、四・九)

イエスに於いては、神の恵みが天地に満ちており、恵みのそこでは、善も悪も、滅びも救いも罪も義もなく、神の栄光がたぎっているだけです。ですからイエスは次のように提示された。天は神の御座であり、地は神の足台である。

—マタイによる福音書五章三四節以下—

イエスとパウロに共通なるもの

この世を否定するようなイエスやパウロの言語表現が聖書に記されています。しかし、それらの表現はこの世を否定するものではなく、注意深く聞くなら、それは、神がしつらえてくださったこの世の舞台なればこそ、もの“として成り立ち得る一つ一つであるにもかかわらず、それ自体

で存在しているのがこの世であり、自分の人生なのだと思います、その在り方、生き方、考え方の念おもいの歪ゆがみに対する否定なのです。そのような生き方の論理を「この世の知恵」として否定されたのです。さらに、神の靈的な智慧と力（神の支配）に開眼せず、更新されない自我のままで生きる人を「肉の人」と言い、肉の人のままでは本当の安心を与える命の根っこ、即ち神の恵みの支配に与かることは出来ない、ということイエスは次のように語られた。

わたしについて来たいと思う者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるうか。

— マタイによる福音書一六章二四節以下 —

自分の持ち物をことごとく捨て切らなければ、あなたがたのだけ一人としてわたしの弟子ではありえない。

— ルカによる福音書一四章三三節以下 —

はつきり言っておく、人は新たに生まれなければ、神の国（神の支配）を見る（体験）ことはできない。……肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。

— ヨハネによる福音書三章一節以下 —

イエスもパウロもこの世を否定したのではなく、この世の根っこにたぎる神の支配に気づかな

いままでこの世を肯定する「この世の知恵」の虚構性と「肉の人」の空しさを指摘したのです。イエスにとって天も地もすべて神の恵みが満ちている場です。だが、この世の知恵だけに生きる肉の人には、その場は「隠されて」見えない。神のお恵みの世界は、この世とは別のところにあるのでなく、人が立っている足元に、支える命としてたぎっているのです。イエスはその事実を見よ！その命の原音を全身で聞け！と言われる。

次の示しもその一つである。

パリサイ宗の人々が、神の国(神の支配)はいつ来るのかと尋ねた。イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実にあなたがたの中にあるのだ。」

——ルカによる福音書一七章二〇節以下——

この場合の「中にある」とは、ただ「中にある」ということではなく、その人が神の支配に包まれ、神の支配の働きの内に置かれている、ということである。

しかし「神の支配」は、肉の人には隠されていて、世の知恵では見ることが出来ないとされる。隠された神のお恵みの支配を知るには、神の霊的な促しによっていただく「神の智慧」の働きで認識出来るようになる。それゆえに、だれでも聖霊による智慧の促しで自己を否定するならば(「ここを貧しくするなら」、それに逆対応して隠れたところ(神の支配が、更新されたその者の理性)に、自己の根拠または根源として露あらわになるとイエスは言われる。(マタイ五・三)パウロはその自己の根源の命に開眼し歎喜の声を発した。

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられる。

—ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節—

「心を貧しく」するとは

イエスは言われた。

心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

—マタイによる福音書五章三節—

「心が貧しい」とは、この場合「^が我を張らない心の状態」のことです。言いかえれば、それは、心が素直になっている状態です。心が全く素直になりますと、自分の本当の姿が自然に見えてきます。

しかし、人間は自分で考え、自分で造り、自分で自由に行動できる能力、つまり自分自身の意志と判断にもとづいて自由に行動できる知性という能力をもっているのです。人間の主人は人間自身であり、自分の主人は自分自身である、^がと思い込んでしまったのです。そればかりか、人間は万物の主人である、^がと思いあがってしまいました。その結果、自分自身の本当の姿を素直に見る

心を失い、人間より偉いものはいないのだという傲慢な自我、つまり“我を張る心”を持つようになりました。

たしかに、人間は素晴らしい智恵を持っており、その能力を働かせて高度な科学技術や素晴らしい文化や芸術を作り出し、一人一人が互いに協力し、より良い未来を目指して一生懸命に生きています。しかし、人間の主人は本当に人間自身なのでしょうか。自分の主人はたして、自分自身なのでしょうか。このように反省することは、理屈のことではなく、自分自身についての真実を知るといふ意味でも大切なことです。例えば、自分は、自分の意志でこの世に生まれて来た者ではありません。気がついたら自分の意志で考え行動できる一人の人間として、そこに居たのです。たしかに、自分の意志で考え行動出来る者、という点では、自分は自由人であるかのように見えますが、この時代のこの場に、この性別と能力とを持つ自分としてそこに居るといふことは、自分の計らい以前の出来事です。気がついたら、そこに置かれていたのです。その事が偶然であれ、必然であれ、それが悪であれ善であれ、一切がその者を越えた、その者についての決定なのです。このように反省するとき、誰もが、自分は自分としてこの世で生きるべく既に備えられた場に置かれたとしか言いようがありません。さらに置かれた場を見ると、光があり、水があり、風があり、大地があり、動物や植物その他さまざまなもの、色々な姿形をもって、互いに関わり、その関わりの一員である人間として自分が居る……。このように自分自身の存在を反省するとき、自分の主人は自分であるなどと、我を張ることは出来ないし、それは誤りであることに気づくのです。そういうことが「心を貧しくする」ということです。

「心を貧しく」して行くと何が見えるか

「心を貧しく」して行くと、不可思議の世界が見えてきます。不可思議の世界とは、人間が思ったり論議したりして知る事が不可能な世界ということです。

人間の思いの枠を遥に越えている不思議の世界のことを「超越的世界」とか「神秘的境界」と一般に言われていますが、そのような世界はこの世とは別にあるのではなく、この世と深い関わりを持っており、むしろこの世を支えつつ同時に一体であるような世界として働いている命の世界だといえます。

しかし、人間は一般に、この世だけしか見えませんから、この世だけが実在の世界であって、それ以外の世界は無いと思っています。それは先にも言いましたとおり、人間は自分で考え、自分で造り、自分で行動する知性という能力を持っているので、その能力の枠を越えて見えない世界は認めません。つまり、この世はこの世だけで成り立っており、この世の根っこはこの世にある、と思ひ込んでいるのです。しかし、どの人間も「自分」は気がついたらこの世に置かれていたのであり、さらに、この世自体も人間の計らい以前に既に備えられていた場なのです。その意味で、人はただその自分を生きるだけの者なのです。このような人間存在の事実を称して「人間は被造者」である、と言うのです。

自分の主人は自分である、自分の意識で自分の人生を自由にあやつれる、と思うなら、それは

傲慢です。人は決定された場に、決定された被造物として「生きよ！」と大いなる命の促しを受け生かされている者にしかすぎません。

このような人間存在の「秘義」とも言うべき事実を神話的に表現したのが旧約聖書の天地創成の物語であり、人間の創造の物語です。先に少し紹介しましたが再びその荘嚴な言葉の響きに耳を傾けてみましょう。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であつて、闇が深淵の面にあり、神の靈風が水の面を動いていた。神は言われた。

「光あれ」

こうして、光があつた。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇とを分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼びられた。夕べがあり、朝があつた。第一の日である。

神は言われた。

「水の中に大空あれ。水と水とを分けよ」

神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられそのようになった。神は大空を天と呼びられた。夕べがあり、朝があつた。第二の日である。……。

神は言われた。

「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ」

そのようになった。……。

神は言われた。

「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の天空の面を飛べ」……神はそれらのものを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ」
夕べがあり、朝があつた。第五の日である。……。

神は言われた。

「われわれにかたどり、我々に似せて、人をつくろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うもの全てを支配させよう」……。神はお造りになつたすべてのものをご覧になつた。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があつた。第六の日である。

—創世記一章一節—一三節—

尚、人間の創造について、更に次ように記してある。

主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息(霊)を吹き入れられた。人はこうして生きる者となつた。

—創世記二章七節—

キツラに見えてくること

旧約聖書の天地創造の物語は神話です。神話とは何の意味もない作り話ではない、又非科学的な古代人の思いが生み出した物語でもありません。聖書に於ける天地創造の神話の本来の意義は、

は、人間とその世界の存在理由を提示しているものなのであり、したがってそれは、実存論的に理解するところに神話の意味と真理があるのです。その意味で先にも述べたごとく創造神話は、天地があり、人間が存在するということの「存在の秘儀と根拠」を解釈提示しているのです。天地創造の神話は科学的な宇宙論ではない。

人は自分が生きている意味や根拠を、地上の見える世界の何処にも直接見出すことはできません。なぜなら、見える世界は見えない大いなる命から現れ成った物にしかすぎないからです。目に見える世界は、あるとき現れ、やがて消えて無くなる物です。しかしその事が決して虚しい事ではないということが理解出来るのは、そのことが現れ成った物の定めであり、その定め自体が大いなる命の営みの現れであるという秘義に開眼するときです。

虚しいとか虚しく無いとか考え判断する知恵は、この地上の見える世界に自分が生きる根拠と意味を見出そうとする世俗的な自我が作り出す幻想です。しかし存在の秘義に開眼した者は、草が枯れ花が散り、人が生まれ、死ぬ、そしてこの世がすべて過ぎ去るといふ出来事が、現れ成った物の定めなのであって、その定め自体が大いなる命の営みの現れであり、それ事態が命の栄光の現れなのだということを深く知るのです。

人間は、土の塵です。にもかかわらず神に似せ、かたどり造られ、神の命の息(神の霊の息吹)を吹き込まれることによつて「生きるもの」となったと言ふ。それは、神に相對する者として自覚的に生きる者として存在を許されたということであり、神を反映するものとして有らしめられたということである。このことは神の言葉、即ち神の念であり、神の意志であり、神の霊の息吹によつて現れ成った万物に於いても同じである。それ故に、現れ成った物は、物であつて物では

ない、だから物なのである。物はすべて神を反映しているのだ。そこに物の尊さがある。これは存在が秘める奥義なのです。

見えるものは見えないものから出ている。それには定めがある。また、見えるものは、その限定に在りながら同時に限りなき命を現しています。イエスはこの命の世界を見ており、知っており、その命を直接生きられ証示された。イエスの言動はただこの一点のみを提示している。例えば「種を蒔く人のたとえ」もその典型的なひとつです。(マタイによる福音書三章三節〜二三節)

以上のように「心を貧しく」して、自我を突破するとき、この世が神の命のたぎりに満ちている事実に関眼するのです。それを気づかせる働きが「神の霊」です。その意味で、「心を貧しくする」ことで自我を突破するとは、神の霊の息吹によって更新された自我の出現であり、それは、まさに更新された知性(理性・分別)による変貌であり、一新した自我の誕生なのであります。このことを使徒パウロはローマの信徒への手紙一三章二節に於いて「知性(理性)の一新(更新)によって、(霊的力で)変貌せしめられよ」と語り且つ勧めたのです。

聖霊体験は理性の否定排除のことか

聖霊を体験するということは、超自然的、超理性的、超人間的なこと、又は非合理的なことであり、人間の理性の働きとはまったく違うと考えられています。イエスも言われた。

はつきり言っておく、人は新たに生まれなければ、神の国（神の支配）を見ること（体験）はできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。

—ヨハネによる福音書三章一節以下—

使徒パウロも、聖霊によらなければ、だれも十字架にかけられてのろわれた者としか考えられないイエスを、神の子キリストですとは告白できない、と言っています。（コリントⅠ—二章三節）

しかし、イエスやパウロの語るところを、よく聞くと、その内容は、単なる理性の排除や否定だけの非合理性の強調に終始しているのではない事がわかります。

聖霊体験が生み出すこと

たしかに、聖霊体験は上から即ち神から、人間の知恵を越えた超越者からの働きかけによることです。その意味では人間理性による知恵とは違います。したがって神の世界に開眼するためには、自我を中心とする知恵の「心を貧しく」しなければなりません。（マタイによる福音書五・三）そして、心を貧しくするのは当の人間の信仰によるのだが、そのように人を導き気づかせるのは超越者の働きとしての「聖霊」です。これについてイエスは次のように言われた。

その方(聖靈)が来れば、罪について、義について、世の誤りを明らかにする。……真理の靈が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。

—ヨハネによる福音書一六章八節以下—

また、パウロも次のように語ります。

靈は一切のことを、神の深みさえも極めます……神の靈以外に神のを知る者はいません。わたしたちは神からの靈を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。そして、わたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、「靈」に教えられた言葉によって靈的なことを説明するのです。自然の人は神の靈に属する事柄を受入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないからです。靈によって初めて判断出来るのです。

—コリントの信徒への手紙I二章六節以下—

ここで、わたしたちが確認しておかなければならないことがあります。それは、聖靈体験とは人を神の超越世界へ移し、けんざい 現存的な現実世界から離脱させることではないということ。また、矛盾と不条理とに満ちた現実世界、すなわち歴史的な現実の直中で、人間を本当に人間らしく生かす知恵と力とを与えられることが聖靈体験であるということです。

人間が生きる場は、地上の「ここ」を離れては何処にもありません。つまり、人間としての私

がどのように生きるかという実存的課題を背負って生きている場が地上の“ここ”であり、そして、その“ここで”上から即ち神による、わたしの聖霊体験が起こるのです。したがって、聖霊体験は極めて実存的な体験なのです。つまり、現実に限定されているわたしに於いて、超越的又は神的力量が臨み、その力がその者の限定された現実の如何にかかわらず、また、その限定の壁を貫いて、その者を人間として完成させずにはおかない神の力が“ここで”始動するのが聖霊体験です。この事をパウロは幾度も語っています。例えば、

あなたがたに聖霊を与えてあなたがたの間で力を働かせるお方。

—ガラテヤの信徒への手紙三章五節—

あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げて下さる。

—フィリピの信徒への手紙一章一八節—

ですから、新約聖書の使徒言行録は、使徒たちが聖霊を受けるということについて次のように語る。

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。

—使徒言行録一章八節—

では、聖霊を受けた使徒達にどのような事が起こったのか、その様子を使徒言行録が記す「五旬祭」の場合で見てください。

五旬祭が来て、一同（使徒たち）が一つになって集まっていると突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っている家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉で使徒達が話しているのを聞いて、あっけにと取られてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしている人たちは、みなガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、バルティア、メディア、エラムからの者がおり、またメソポタミア、ユダヤ、カツパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。またローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビヤから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」人々は皆驚き、とまどい「いつたい、これはどういうことなのか」と互いに言った。

—使徒言行録二章一節以下—

「五旬祭」に使徒達に起こった出来事についてはさまざまな解釈、見解があるでしょうが、このような使徒達の状態性に於いて知り得る一つは、聖霊体験がその者にもたらすことは、神の世界が、または、神の言葉が人の世界へ、人の言葉となつて一人一人の実存の場に届けられ、「神の偉大な業（福音）」が知られしめられた、ということですから。そしてさらに、その出来事を通して、それを聞く者の在り方、生き方を内面から更新し変貌せしめる力となることです。

聖霊体験は人間の何を更新させるのか

聖霊体験は人間の理性の排除否定を意味することではない、また、この世を軽視する生き方をもたらすものではないことを再度確認しておきましょう。

聖霊体験は、「**霊**」は一切のことを、神の深みさえも極める（コリント一・一〇）その「**霊**」の働きを（わが心身）に命ずることです。その結果「それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになる」のです。（コリント一・一一）ここで「知るようになる」とは、霊的に悟つたそれを「理論的知識として所有していることを意味している」のです。（ハルツ／G. シュナイダー篇「新約聖書釈義事典」—教文館）このような意味での「知るようになる」ことを「開眼かいげん」というなら、聖霊体験は「神の力」と「神の智慧」に開眼する事だと言えます。

「知るようになる」という意味での「開眼」は、**ココ**で**起こる**のです。ということとは、

「わが心身」に於いて起こる事、という意味で、聖霊体験は極めて実存的体験であると言ったのです。したがってその出来事は「人の力」と「人の知恵」とが否定排除されるのではなく、むしろ、人の力、人の知恵の根柢に「隠されてあり」人の力と人の知恵とを生み出し、かつ保証する「神秘としての」根源的な本当の力、本当の知恵に開眼するということになるのです。(コリントⅠ二・七)

世間一般では、この世の力、この世の知恵はそれ自体で充足していると思われています。しかし、聖霊体験で人が開眼することは、この世の力も知恵も限りがあるもの、過ぎ行くもの、必ず滅ぶもの、絶対的なものでないもの、それ自体は虚しく、不安定で本当の支えにならないものだという事を「知るようになる」ことです。と同時に、本当の拠り所とは何か、または、この世の力や知恵の根柢、根柢とは何かということを主体的に「知るようになる」ことです。この「聖霊体験」の様子をパウロは「知性(理性)の一新(更新)によって、(靈的力と智恵で)変貌せしめられよ」と言いました。(ローマ一・二・二)

さて、このような様子の具体的、かつ、決定的な現れが「言が肉体となつて、わたしたちの間に宿られた」というヨハネによる福音書におけるキリストの「受肉」という現象(ヨハネ一・一以下)なのだが、ここでは先述の「五旬祭」の出来事に於いて現れた出来事に再度注目してみましよう。

使徒言行録二章に於ける使徒達の聖霊体験は、極めて靈的な体験です。しかしその出来事は、その場にいた人たちにとって不思議で神秘的な出来事でありつつ、その出来事に於いて、その現場に諸国から来た大勢の人たちの一人一人が、「自分の故郷の言葉で使徒達が話しているのを聞

いた」のである。それは、そこに居る人たちの一人一人が理解来る言葉で話した、ということだす。その意味で、この出来事は、外国語が話せないガリラヤ人である使徒達が突然、聖霊に満たされ知らない外国語（「異言」）を話した、という「特別な聖霊体験」ということを越えて、「聖霊体験」とは何か、という事を示唆した出来事であると言えます。

つまり、そこで起こった出来事は、神の智慧が人の知恵を姿貌させ、神の力が人の力を一新した出来事なのと言えます。と言うことは、隠されて神秘と思われている神の世界を、だれでもが了解出来る人間の知性の世界へ受肉する起動力として働くのが聖霊であるということだす。

人間の知性にとって神の智慧と力の世界は決して異質なものではありません。むしろ、人間の知性の働きを本来の働きとなるように正し、完成させるように起動するのが神の智慧と力なる聖霊の働きだといえます。にもかかわらず、人間の知性を否定排除することが聖霊の働きであり、そのような働きに基づいて生きる事が「信仰」だとするなら、その信仰は「独善」の域を出ていないと言えます。

イエスと人々との立脚点の違い

ある人がイエスのもとへ来て言いました。「先生、私の兄弟に、遺産を分けるよう、言ってください。」イエスは言われた。「人よ、誰が私をあなたたちの遺産分けの裁判人や分配調停人に仕立てたのか」そして、その場にいた人達に言われた。

「みなさん、どんな貧欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど財産を持つていても、人の命はその財産から出て来るものではないのです。(ルカによる福音書二二章一三節以下)

遺産分けて、兄弟が互いに醜い争いをするのは世の常です。ここに登場する人も、その争いを自分に都合よく調停してくれることをイエスに求めました。それに対するイエスの答えはとも冷淡に思われます。しかし、その答えには、私たちが見落としている人生の大事が指摘されています。

人がこの世で生きて行くうえで、「物」が必要であることは言うまでもありません。どの人も物との関わりの中で生きており、物なくして人は生きてはいけません。イエスはそのことを十分承知しておられます。なぜなら、イエス自身肉体を持った一人の人間として毎日「物」との関わりの中で生きておられるのですから。しかし、先のイエスの言葉を聞きますと、「物、即ち財産など、どうでもよいのだ！」と言っておられるように受取りかねません、が、イエスは、物について、そのような軽率な言葉を語られたことは一度もありませんし、ここでも、そのようなことは語ってはられません。

イエスは、人にとつて物が必要か、必要でないかということをおられるのではなく、物が人間の生命を支えている源ではなく、財産を持つていることが、人が生きている命の究極の支えではないのだ、ということを示されたのです。

しかし、人はその命の事実に関眼することなく、目に見えるこの世の内部の物や財産に、自分の関心のすべてを注ぎ、それらの物や財産が自分の命を支える源だと思ひ込み、それを有り余るほど自分の物として持つことで、自分の人生に安心を得ようとします。しかし、イエスは、それ

らは、命の源ではなくて、それは命の源から生み出された、この世の内部の一つであって、命を支える第一のものではなく、第二のものなのだと言われるのです。にもかかわらず、それらを命の究極の支え、本当の拠り所と誤解して、自分のすべての関心を「それに」向けて生きる生き方を「貧欲」と言われたのです。その意味で漢字の「貪欲」からイメージする、たんなる「欲が深いこと」に対するイエスの倫理的な戒めと理解してはなりません。

イエスが神から託され自らの身に於いて語られたことは「存在するもの」が、そこから生まれ、それによって成長し、それによって完成させられ、そして、それへと帰って行く根源的な命、即ち「神の支配」、又は、究極の支えが何であるかを身をもって証示することでした。それだからこそ、イエスにとつては、この一事を無視しては、すべての存在意義と存在理由が無くなってしまう「なくてはならない一大事」だったのです。ここで、イエスがマルタに言われた言葉を思い出します。

「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、なくてはならぬことはただ一つだけである。マリアは良いほうを選んだ、それを取り上げてはならない。」

— ルカによる福音書一〇章三八以下 —

第一の世界と第二の世界

イエスは人間の本当の支え、究極の支点到に先ず開眼せよ、と提示される。その第一の命の世界から、この世の全てが生まれ、保持され、そして完成されて行く命の事リアリタイ。実、その見えない命の奥義を身をもって証示された。この世のすべては第一の、即ち根源的な事リアリタイ。実から生じた第二の世界なのです。現れたものがどれ程美しく、清く、偉く、確かなものに見えても、人の命の究極の支えにはならない第二の世界にすぎない。だのに、再度言うが、人は第二のこの世の現実を第一の抛り所と思い込み、自分の確かな土台、唯一の抛り処として、そこを起動点となし、「宗教」さえも、したがって「神」さえも、この世の財産の一つと化してしまふのです。そのような人間の強欲な生き方を、イエスは「貪欲」と言われた。ここでもう一度、先に語られたイエスの言葉を、注意深く聞いてみましょう。

みなさん、どんな貧欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど財産を持っていても、人の命はその財産から出て来るものではないのです。——ルカによる福音書一二章一三節以下——

第一の世界、即ち、根源的な神の支配からでなく、第二の世界、即ち、この世から生まれたものを起点としてイエスの言動を見るなら、それは単なるこの世の倫理や道德の教師又は、お人好

しのヒューマニスト、観念的な理想主義者、愛に満ちた聖人、さらに直接利益を与える超能力者のように思い、そのイエスを担ぎまわる事になります。その場合良く聞く言葉は「イエスは、本当に愛にみちた人、最も尊敬に値する立派な人です」と。たしかに、イエスは偉大なお方であり、本当に尊敬すべき生き方をなされました。しかし、そこにイエスの本当の偉大さ、貴さがあるのではない。

イエスは言われた。わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。——ヨハネによる福音書九章三九節以下——

「見えるようになる」とは、第一の世界、「根源的な神の支配の世界が霊的に深く洞察するようになる」ということです。イエスはいつでも、どこに於いても第一の場から発語しておられるのです。それ故に、第一の場に開眼しないままで、第二の場、即ちこの世の場からイエスの言葉を受けるならイエスが証示する世界はその人にとってただの実践出来ない憧憬どうけいの世界を語る言葉、又はだれも出来ない高貴な事を実践された」とても立派なお方お方になつてしまうのです。

第二の世界、即ちこの世は必ず消えて無くなる虚しい世界です。本当の命を生み出すことは出来ない世界なのです。

人にとって、「真実の世界」リアリティ「現実」リアリティは第一の場だけです。ここにこそ命を生み出し、躍動させ、完成へと起動する力と智慧が、たぎっているのです。まさに、「神の根源的な命の世界は、言葉ではなく、力なのです」(コリントI四・二〇)その世界に目覚めるために、人はこの

世に生かされているのです。人がこの世に生きていく意義はその一点にあるのです。イエスは、それを悟れ、それに気づけ、それに開眼しなさい、と叫ばれるのです。(マルコ八・十八)

だからこそ、イエスは先の「遺産分け」の出来事の中で次のように提示なされた。

それから、イエスはたとえを話された。「或る金持ちの畠が豊作だった。金持ちが『どうしよう。作物をしまつておく場所がない。』』と思ひ巡らしたが、やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言つてやるのだ。』

「さあ、これから先何年も生きて行けるだけの蓄えができたぞ、一休みして、食べたり、飲んだりして楽しめ」と。』しかし、神は、『愚かな者よ。今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか。』と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりである。

——ルカによる福音書二二章一六節以下——

「自分のために富を積む」とは、第一の世界に開眼しないまま、第二の世界を出発点としてなされる、観方^{かんかた}や考え方、努力、生き方のことです。

「神の前に豊かになる」とは、第一の場、即ち、神の支配、に開眼し、そこにたぎる命に生かされている自己に気づき、苦しいけれど、つらいけれども、生きられる、生きていこうという希望と力が生まれる生き方のことです。

もう一つの出来事

イエスと人々との立脚点りつきやくてんの違い、または、ずれについて、もう一つの出来事を見てみましょう。

イエスがなさった不思議な業によつて、食物を満腹するまで与えられた人々がイエスの追っ掛けマンになったという話です。聖書は次のように記しています。

その翌日、湖（ガリラヤ湖）の向こう岸に残っていた群衆は、そこには小舟が一そうしかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に船に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気づいた。ところが、ほかの小舟が数そうテイベリアスから、イエスが感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所に近づいて来た。群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないことを知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜しもとめてカファルナムに来た。そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ（先生）、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。イエスは答えて言われた。「はつきり（まことに）、まことにあなたたち言っておく。あなたたがたが、私を捜し求めるのは、"しるし"を見たからではなく、ただ、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでも無くならないで、永遠の命に生きる食べ物のために働きなさい。これこそ、神の子（わたし、神）があなたがたに与える食べ物である。」

私たちはときに、関わる人々の、自分に対する無理解を嘆きます。「夫は私のことを理解してくれない」と妻は嘆く。一方、夫は「妻は私のことをまったく分かってはいない」と言う。又、「親は自分の考えを私に押しつける」と子どもは言う。「親のことを思わず、自分勝手に、反抗ばかりする」と親は嘆息する。とにかく、何処にあつても人と人が互いに理解しあうことは難しいことです。

「相手への無理解」ということは、家族という共同体の仲に於いても起こることであつて、たとえ同じ思想・信条に立っていても、その仲間で個人同志の意見の対立があり、「あいつは、本当に分かっていない」と、それぞれに思っている場合が多いようです。

このような無理解は、イエスと生活を共にした弟子達においても起こりました。例えば、イスカリオテのユダの場合もその一つで、結果的にイエスを敵に売り渡すという裏切りとなり、イエスが十字架刑に処せられる契機となりました。一方、裏切つたユダは自責の念に駆られ、自分の首を木に吊るして自ら命を絶つたのです。このような、裏切りや自殺という悲劇には至らなくても、イエスに対する弟子たちの無理解については、福音書をよく読んでみますといろいろな場面において見るができます。

例えば、弟子たちの間で、自分たちのうち誰がいちばん偉いか、という議論が起きたことが記されてあります。(ルカ九・四六)また、弟子のヤコブとヨハネが母と一緒にイエスのところへ来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。イエスが、「何が望みか」と言われると、母は言った。

「先生が王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人は先生の右に、もう一人は左に座れるとおっしゃって下さい」と願った。それに対してイエスは、「あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっているはずだ」と言われた。……他の十人の弟子たちはこれを聞いて、二人の抜け駆け的な行いに腹を立てた、と記されてあります。(マタイ二〇・二二以下)先の場合もそうだが、イエスは自分の信仰の世界を全く理解していない弟子たちの言動に嘆かれ、やさしく諭しておられます。イエスの身近にいて、行動を共にしている十二使徒でさえイエスに対する無理解の程度がこれほどなのです。まして群衆においてはなおさらだ、と言えましょう。

群衆の、イエスに対する無理解について、もう一つの出来事を見ましましょう。それは、イエスが不思議な業により、食物を満腹するまで与えられた人々と、その噂を聞いた多くの人達が、イエスの「追っかけマン」になった話です。聖書は次のように記しています。

その翌日、湖(ガリラヤ湖)の向こう岸に残っていた群衆は、そこには小舟が一そうしかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に船に乗り込まれず弟子たちだけが出かけたことに気づいた。ところが、ほかの小舟が数そうテイベリアスから、イエスが感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所に近づいて来た。群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないことを知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜しもとめてカファルナムに来た。そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ(先生)、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。イエスは答えて言われた。「はつきりあなたたち言っておく。あなたたちが、私を捜し求めめるのは、"しるし"を見たからではなく、ただ、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物

のためではなく、いつまでも無くならないで、永遠の命として残る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子(わたし、神)があなたがたに与える食べ物である。」

—ヨハネによる福音書第六章二二節以下—

食べ物生きて行くために必要欠くべからざるものです。イエス当時の人々にとっても、それは毎日の切実なことでした。その食物を、不思議な業で、無償で与えてくれたイエスは、まさに救い主だったでしょう。彼らがイエスを懸命に捜すのは当然のことです。

しかし、やっとの思いで見つけたイエスの対応は、先の遺産分けの調停を求めた者に対する答えと同じく、とても冷淡に聞こえます。もう一度イエスの応えを聞いてみましょう。

イエスは答えて言われた。「はっきりあなたたちに言うておく。あなたがたが、私を捜し求めているのは、「しるし」を見たからではなく、ただ、パンを食べて満腹したからだ。朽ちてなくなる食物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命として残る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子(神)があなたがたに与える食べ物である」

—ヨハネによる福音書第六章二六節—

パンだけをイエスに求めて激しく迫る人々に、イエスは「あなたがたに、はっきり言うておく……」と、ご自分の使命を明確に語られた。「はっきり」とは「アーメン、アーメン」の訳語で、イエスの場合、特に重要な宣言をする冒頭に、見えない神の真意を証示するために、この言葉

語られた。「まことに、まことに」又は「本当に、本当に」と訳される場合もあります。

イエスは食べ物はどうでもよい、とか、食べ物も生きるうえで必要だが、それより、もっと大切なものがある、と言っておられるのではない。イエスが示されることは単純明快「永遠の命として残る食べ物のために熱心であれ！」と。そして、わたしはその命のパンなのだ、と言われる。(ヨハネ六・三四以下)

しかし人々には、このイエスの言葉の真意、イエスの言葉が秘める神の命の世界、それはイエスが生きておられる根拠からの証言、即ち、人間の生の根拠を証示する「しるし」だということがまったく理解出来ませんでした。彼らはただ、現れ出たその事を、損か得かという自我の欲望に基づいて関わるだけです。だからイエスは言われた。

あなたがたが、わたしを捜し求めているのは「しるし」を見たからではなく、ただ、パンを食べて満腹したからだ！と。イエスの言動のすべては「永遠の命のしるし」なのです。「しるし」とは、永遠の命を証示する出来事であり、したがって、パンの出来事の奥に、神の永遠的な命の息づかいを洞察みとらしないままに、ただ、目の前に起こった事柄を、自分の損得の思いのみで捉えるなら、その人は「しるし」を見たことにはならない。

このような人々の無理解をイエスは旧約聖書イザヤの言葉を用いて次のように示された。

あなたがたは聞くには聞くが、決して理解せず、

見るには見るが、決して認めない。

この民の心は鈍感になり、

彼らの耳は遠くなり、

自分たちの目を閉じてしまった。

こうして、彼らは目で見ることなく、

耳で聞くことなく、

心で理解せず、悔い改めない。

わたしは彼らをいやさない。

— マタイによる福音書一三章一四節以下 —

さらに、もう一つの出来事

イエスと人々との立脚点の違い、又は、視点のずれ、イエスに対する無理解について、さらに、もう一つの出来事を見ましよう。

それは、イエスの不思議な業によってパンを与えられた出来事のつづきの事柄です。聖書は次のように記しています。

そこで、人々はイエスのなさった「しるし」(パンの出来事)を見て、「まさにこの人こそ、(私たちが待っていた)来るべき預言者である」と言った。イエスは、人々が来て、自分を王にするため連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に去って行かれた。

— ヨハネによる福音書六章一四節以下 —

イエスの厳しい言葉も人々には正しく理解されず、むしろ、その不思議な業を見た人たちは、「この人は、真に世に来るべき預言者である」と思い、イエスを自分たちの王にしようとしませんでした。

「預言者」とは、旧約聖書に於いては、神の言葉を預かつて言う、所謂、神の代弁者のことをさすのですが、当時、人々の間でモーセのような偉大なる預言者（メシア・救済者）の到来を期待し待望する風潮が一般にあり、パンの出来事を見た人たちは「この人こそ来るべき偉大なる預言者」と思い、イエスを自分たちの王にしようとしたのです。しかしイエスは人々の願望を退け、ひとり山に去って行かれた。

なぜイエスは去って行かれたのか。おそらくイエスは、その時、もつとも厳しく自分の身に危険を感じられたのではないだろうか。自分の身に危害を受ける危険ではありません。そうではなく、イエスが見て、知って、生かされている本当の命の根源からの逸脱という危険です。神の命の根源から逸脱するなら、この世でどれほどの偉大なるものを得たとしても、それは永遠の命に結びつくものではない。この大事を人々に証示する勤めを、イエスは神から与えられた使命だと知っておられた故に、王というこの世での最高の権力の座をもイエスは拒否なさった。イエスにとって王の座は第一のことではなく、第二の事だったのです。

しかし、人は第一のことに目覚めないうままに、第二の事を第一のことであるかのように思い違いをして、それに自分の人生のすべてを費やし、結局、虚しく死んで行く。

では、イエスと弟子たち、または人々との視点の決定的な違いは、何だったのでしょうか。

言葉の出所の違い

言葉は語る人の思いから生まれて来る。言葉は語る人の思いの表現です。

悲しんでいる人からは、悲しみの言葉が、悲しみの響きとともに出てきます。喜んでいる人は喜びの言葉をその響きとともに表出します。

語る言葉を聞いてみると、その人の思いが分かるだけでなく、その人の「生き方の根の世界」が見えてきます。

それにしても、「十人十色」又は「十人十腹」と言われるように、人の考えや好みはそれぞれに違いますし、違っていても不思議ではなく、むしろ当然のことです。しかし、そういう表れたレベルでの違いではなく、もっと根本的な次元、つまり「生き方の根の世界」の違いというものがあるのです。それは、ただの自我から出てきた言葉と、その自我を超えた深みの自己から出てきた言葉との違いです。結論を先に言いますと、イエスの言葉と弟子たちや群衆の言葉との違いはこのレベルでの違いであって、「人それぞれの思いや考えは違うのだ」というような、ただの自我から出てきた程度での言葉や思いの違いではないのです。

イエスは自我レベルを超えた深みから、つまり「自我の向こう側」から言葉しておられるようです。しかし、弟子や群衆は、ただの自我の思いから言葉を語るのので、先に述べたように、イエスが語られる言葉が理解できませんでした。そのことをイエスは、次のように言われた。

あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らず、見るには見るが、決して認めない。

— マタイによる福音書一三・一四以下 —

どうやら、私たちの言葉の出所とイエスの言葉の出所とは根本的に違うようです。その違いは、ただの自我から出てきた言葉と自我を超えた深みから出てきた言葉との違いです。

群衆や弟子の言葉の出所

群衆や弟子たちの言葉の出所は、彼らの語りを聞くと、所謂ただの自我からの言葉のように思えます。

それにしても「ただの自我」とは、どういう自我なのでしょう。自我についてはいろいろ難しいことが論じられますが、ここでは「自分の主人は自分であると思っている自分のこと」を「ただの自我」ということだとしておきます。それは、「自分は自分以外の何者でもない」と思っている自分のことです。さらに別な言い方をすると「自分を中心に据えた自分」のこと、とも言えます。その意味で「ただの自我」とは「歪んだ自我」だと言えます。なぜなら、それは、自分中心、人間中心の自我だからです。

人は自分の考え、自分の感情、自分の思いで物事を判断して行動することで自分と他人とを区

別し、自分自身を保っています。その結果、「自分は自分の考えで生きているのだから、他人からとやかく言われる必要はない」ということになります。このような自我意識は、自分を自分の主人として生きた方にほかなりません。つまり、その生き方は「自分中心的」なのです。

「自分中心的」と言うと、私たちは「利己主義」を連想します。「自分だけの利益、幸福、快樂を求めて、他人の立場を全く考えない態度、すなわちエゴイズム」というのが利己主義です。

しかし「自分中心的」という「ただの自我」の立場は、自我意識全般に関わる人間の在り方のことを言うのです。それを一言で言えば、「自分が思い願うような自分に成ろうとする自分のこと」です。具体的に言いますと、「自分が思い描いた願わしい自分の生き方、在り方、考え方を自分に課題として背負わせ、そのように生きることを最も正しい人間の生き方と決定する自分のこと」です。さらに、「自分が願わしいとした生き方、考え方をしない人を愚か者として蔑み、そうでない自分を誇る自分のこと」です。

このような自分中心的な歪んだ自我に生きる人は、決して世間で言う「悪人」ではありません。彼らは自分で正しいと思う規範に自分を当てはめ、その規範を誠実且つ熱心に守って、自分が願う自分になるうとして居る人です。彼らが持つ規範はそれぞれ異なっています。一つの主義主張にそれを求める者。特定の人間の生き方を理想とし、その模範をその人に求める者。また、特定の宗教に帰依して、その教えを忠実に遵守して生きようとする者。さらに常識的な社会的倫理を規範とすることで正しい生き方とする者等さまざまです。これらの人たちに共通していることは、結局「願わしい自分の生き方を、自分で描きそのような自分になろう」とすることです。つまり、主義も主張も、又は宗教的な教義も、信仰に於ける神や仏も、結局は、願わしい自分になろうと

する自我意識の貫徹または満足のための「手段」にすぎないのです。言うならばそれらを「自我意識の内に抱え込んだ」にすぎないのです。自我実現のためなら、他人はもちろん、神も仏も聖書も仏典も利用するのです。

たしかに、先に述べた弟子や群衆の言動を見ていますと、イエスと彼らの生き方の根の世界が違います。ここで再度イエスの応答を確認しておこう。

パンだけを求めてイエスを熱心に追いかけた人たちに言われた。

「あなたがたにはつきり言っておく、あなたがたが、私を捜し求めているのは、……ただ、パンを食べて満腹したからだ。朽ちてなくなる食物のためではなく、いつまでもなくなるならないで永遠の命として残る食べ物のために働きなさい。これこそ神があなたがたに与える食べ物である。」

—ヨハネによる福音書六章二六節以下—

自分の願望満足のためにイエスにひれ伏した弟子とその母や人々に言われた。

「人よ。誰が私をあなたたちの遺産分けの分配調停人にしたのか。用心せよ。人の命は財産から出てくるものではない」

—ルカによる福音書一二章一三節以下—

「あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっているのか、分かっているのか、本当にお前たちに与えようとしている大切なものが分かっているのか、（わたしが、本当にお前た

— マタイによる福音書二〇章二一節以下 —

パンを満腹するまで無償で与えてくれたイエスを、自分たちの王様にしようとした群衆を見たイエスは、

「ひとりであつた、山に去つて行かれた」

— ヨハネによる福音書六章一四節以下 —

このような歪んだ自我意識に生きる人間の姿を使徒パウロは、以前に自分もそこに身を置き熱烈に求道していたユダヤ教パリサイ派の信仰人の在り方に見たのです。彼は次のように言いました。

わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい知識(深い洞察)に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかつたからです。 — ローマの信徒への手紙一〇章二節以下 —

このような知識人、政治家、起業者、宗教家、信仰人、主義主張をかかげる人々がこの世にうようよしているようです。

「ただの自我」即ち歪んだ自我から出発する生き方は、それがどれほどの熱烈なものであり、またそのように見えても、パウロは「正しい知識(深い洞察)に基づくものではない」と断言しま

す。彼はその理由を続けて語ります。彼らは「神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかつたから」だと。

「神の義」とはどういうことなのでしょうか。神学的には難しい説明がなされているようですが、それを私流に言えば、「万物を創造し、保ち、完成せずにはおかない神の創造的な命のたざり」のことです。したがって「神の義」とは、単なる「神の正しさ」というような静的、概念的な神についての説明の言葉ではなく、人間の一切の思いに先立って初めからあり、永遠にたざりつづけている創造的な命の働きです。その命の働きの内に宇宙は保たれ、人間は生死を越え生かされているのです。そのような神の義の内では、人間が判断決定する善も悪も、罪も滅びも救いも、生も死も、敵も味方も、男も女も、大人も子供も、天も地も、西も東も、北も南も、その他どのようなものも意味を失い、無くなってしまうのです。「神の義」は天地を包み、成るようになり成らしむる創造的な根源的命のたざりなのです。

万物は「神の義」を離れて一瞬といえども有り得ず、木の葉一枚、頭の毛一本も地上に落ちることはない。これが命の根源的な現実なのです。イエスはこの命の現実を「神の支配」と言われた。そして、この神の命の事実に関眼しないままで、ただの自我の世界で真実だと認識し判断したどのような規範、または、自我意識から生まれた感性で捉えた善や美、神や仏等を人間の究極の支えとするなら、それらは自我意識が生み出した幻想にしかすぎない。すべては一時の夢であり幻であって、消えて無くなるものです。ここに「自我中心的」ということに秘められた「落とし穴」があるのです。この「落とし穴」に気づいた一人が使徒パウロです。だから彼は「落とし穴」に落ち込んだ人の様子を、「熱心であることは認めるが、その熱心は深い霊的洞察に基づく

ものではなく、それは、神の義を知らないままで、ただの自我が生み出す知性の判断、感性による意識、意志による力に基づく自己満足的（自分の義を求める）自我中心の虚しい行い”と言ったのです。その意味で、

「彼らは、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかった。」

—ローマの信徒への手紙一〇・二—

と語るパウロの言葉に、私たちは深く耳を傾ける事が大切だと思います。

あとがき

この冊子は、左京教会で毎月出していた私の個人誌「みちしるべ」に二〇〇二年二月より二〇〇六年二月まで「宗教と人生」と題して記した文章を纏めたものです。そこで読者と一緒に考えたいと願ったことは、イエスが提示した「宗教信仰」を現代状況の中で、見つめなおすことによつて、人間が人間らしく生きる命に、一人ひとりが気づかせていただくことでした。

新約聖書にあるイエスの言葉は、私が「有る」という、有ることの有りのままを、誰もが納得するかたちで証示して下さっていると私は受けとめています。なぜなら、イエスはつまるところ「天然自然」を示されたからです。次のイエスの言葉もその一つです。

人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに（天然自然に）実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実が出来る。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時がきたからである。（マルコ四・二六以下）

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養つてくださる。（マタイ六・二六以下）

天の父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らしてくださる。（マタイ五・四五）

このイエスの語りは、なんと清々^{すがすが}しく明解なことであろうか。
イエスの言葉をこのように受け取ると、正統的なキリスト教の教義の枠に固執するキリスト者の方々は「それは自然神学ですよ！そのような解釈は汎神論的ですね！聖書的・福音的ではありません！」と一笑して省みない。

しかし、これらのイエスの言葉が証し示している命の世界は、人間の観念が生み出す真理を全く超越した「有る」という有りのままの根源的な命のたぎりそのものとしての神秘です。そこでは、「汎神論だ！自然神学だ！聖書的でない！」と叫ぶ人間の観念の一切が無化されている。なぜなら、その命のいとなみは、人間の計らいの枠を超えた命の事実だからです。ちなみに、「神秘」とは、ギリシャ語においては、「目や口を閉じることを意味し、目を閉じることによつて観察の対象は消え、主観と客観の区別が成立する以前の、それに先立つ次元が現れる。それに触れる事が神秘の体験である。またそれは言語で伝えることも出来ないから、人間は口を閉じるほかにい」と小田垣雅也は言う。要するに、その働きをイエスは「神の支配」と言い、使徒パウロは「復活のキリスト」に見た。（八木誠一）そして滝沢克己は「インマヌエルの原事実」と呼び、久松真一は「無相の自己」と言うが、他にも「超個の個」や「絶対矛盾的自己同一」「即非の論理」など、それぞれにその神秘を靈的な直接経験において開眼した方達の言表はさまざまである。私の場合には「創造的な大いなる命のたぎり、創造に於ける自然」と言表す。釈尊が「法」と言つたのはこの創造における自然、または、大いなる命のたぎりのことではないかと思う。

どの人も、胸に一物、背に荷物、いろいろな前荷を背負つて日々生きています。だれもこの人

生の現場から逃れることはできません。また、逃れられる手だてはこの世のどこにもありません。もし逃れられる何かがあると思うなら、それは、更なる人生の重荷を背負い込むことになるでしょう。

このような人生だからこそ、人はますます利己的（エゴイスト）になるのです。しかし、その結果は虚無（ニヒリズム）に陥るだけです。人は一時の露のようにこの世から虚しく消えて行く。

この人間存在の利己性と虚無性を「克服させる命」これこそイエスが証示する福音なのです。「克服させる命」とは、人生に於ける苦しみ悲しみを消し去るものではありません。信仰心が増せば、日常の苦しみ、悲しみ、不幸な出来事が無くなると思うのは幻想です。信仰があるが無かるうが、痛いものは痛いのです。「宗教と人生」とはそのような関係にあるのです。つまり、宗教は人生に於ける幸福製造の機械ではありません。

人生は重荷を背負って坂道を行くようなものです。それは苦しくて辛い、けれども、私は生きて行ける！生きて行こう！生きて行くのだ！と、自分の人生を引き受ける知恵と力を得ること、それが克服させる命なのです。それは、自分が生きて「有る」という命のありようの神秘に目覚めるといふことです。まさに「宗教と人生」との関係はここにあるのです。

X

「苦しくて辛いけれども、人生はなんと素晴らしく有り難いことであろうか」と気づくこと、それを諦観（ていかん）（はつきりと悟る）と言います。諦観とは人生を諦めて生きることではない。生きる現場の根柢にたぎっている創造的な大いなる命を直接経験することによって、有るものが有ること、に目覚めることが信仰なのだと思えます。それを天然自然、即ち「天の然らしむことを自ら

X

然らしむ”有り方、それを言い換えれば、与えられた日々を感謝して普通に生きることにはかからせん。

この冊子に記しました事は理屈のことではなく、私が聖書を通してイエスに出会い、素直に頂いた自分が「有る」という事実の知恵の一部です。お読みくださる方とその知恵を少しでも分かち合う事が出来ればありがたいことだと思います。

冊子として纏めてみますと、すこし大きくなりましたので、三分冊に分けて作ることにしました。この冊子を「みちしるべ文庫」に加えてくださり感謝いたします。

なお、最後になりましたが、教友の小野恵子姉がこの度も、印字と校正の奉仕の労を惜しみなくしてくださいました。あらためて深く御礼申し上げます。

二〇〇六年九月一五日

松下昌義